

業種の枠を超えたヒューマンネットワークを生かし、効率の良い物流を提案できる企業を目指して。

セイコー運輸 株式会社 (鹿児島谷山支部)



代表取締役社長 鳥部 敏雄さん

セイコー運輸 株式会社

本社 / 鹿児島市谷山港二丁目5-32
代表取締役社長 / 鳥部敏雄
従業員数 / 116名
保有車両 / 104台



物流の効率化とコスト削減、そして地球環境の保全。ネットワークを活用しながら、時代の求めるニーズに積極的に取り組む地域経済の牽引役。



セイコー運輸のマークは、大中小の三つの輪が広がっていくように重なったデザイン。このマークに表れている経営指針は「和と話をもって輪をなす」と、鳥部敏雄代表取締役社長は語る。「和」は思いやり、気配り、目配り、「話」は会話、話し合い、挨拶、指示伝達、そして「輪」はチームワーク、連帯、協働ということ。これはつまり、どんな状況であっても、思いやりと会話によって意思の疎通を図れば、人はつながる事ができ、より良い結果を生み出す事ができる、という鳥部社長の信条を表現する言葉でもある。

およそ25年前、オフィスコンピューター時代の到来する直前、鳥部社長はいち早くコンピューター業界に身を置いていた。二十代の終わりにはさまざまな企業のコンピューターシステムを制作するソフト会社の経営にも乗り出していた。事業は順調に伸びていたが、妻の父親の会社を継ぐ必要に迫られ、業種の

違う運送業界に飛び込んだ。「全く業種が違うので、最初は戸惑いましたが、ドライバーさんたちは真面目で気がやさしい人が多く、筋道を立てて話をすれば初心者意見も聞いてもらえることが分かりました」。この当時の思いが、先述の経営指針につながっている。とはいえ、鳥部社長が入社した平成4年は、バブル崩壊の余波が鹿児島に及び、しかも平成5年には8.6水害が襲い、経済は厳しい時代に突入していった。仕事は半減し、半数のクルマが動かない日もあった。リスク分散を図り、平成6年には福岡営業所を開設した。福岡での事業は予想以上に伸び、1年半後には3倍以上の用地を借りて移転した。また同じ頃、荷物の共同配送やモーダルシフトを取り入れ、物流の効率化とコスト削減への取り組みを始めた。

当時、異業種から運送業界に入った鳥部社長の一番の悩みは、同業者の人脈の少なさだ

った。「腹を割って話せる仲間がほしくて」平成8年、鹿児島物流ネットワークシステム協同組合を立ち上げ、全国組織の日本ローカルネットワークシステム協同組合連合会にも加入した。3年目には九州ブロック長も務め、組織改革や教育事業に携わった。「年代を超えて仲間を作り、お互いに助け合っていくというのがネットワーク。個々の努力も必要ですが、全体のレベルアップを図ることも必要だと思います」。県ト協の中でも4年前から21世紀政策委員会の委員長を務める鳥部社長は、環境対策、人材育成など次世代につながるさまざまな取り組みをリードしている。

社内でも早い時期から環境保全対策には力を入れており、職種別の社員でエコグループを編成し、省エネ関係などのテーマについてのグループミーティングを定期的に行い、年2回の安全会議で発表する取り組みを行っている。またグループ別に燃費の管理を行い、

グループミーティングの中で発表し、社員の自覚を促している。それらの取り組みなどが認められ、平成15年、グリーン経営を取得した。また、バイオディーゼル燃料(BDF)の精製機も導入し、地場車両での利用と研究を重ねている。さらに今後、3PL型の提案できる物流企業として成長することを目指し、コンサルタントに依頼し、社員らを勉強会に参加させている。

「社長として大切なことは、次の世代に上手にタスキを渡してゆくこと。社長がいつも前へ出ていと社員が伸びない。どれだけ社員が自覚的に伸びてゆくか楽しみです」。どんな場面でも「和と話をもって輪をなす」ことを尊重し、時代の変化に柔軟に対応している印象の企業である。



トートンカラー(ブルーとベージュ)の車両



追突防止反射テープもセイコー運輸のシンボル



自社でもトラック輸送のイメージアップに努めている



年2回行われている安全会議



自社でBDFを精製するなどエコ活動にも力を入れている



本社事務所